

高次脳機能障害患者の病識評価からの考察

～PCRS(The Patient Competency Rating Scale)を用いて～

中井亜妃子(OT)、

藤原理恵(ST)、笠原由佳子(OT)、飯村恵理子(PT)、塚本美沙子(OT)、奥村薫(OT)

抄録

【目的】回復期における高次脳機能障害患者では、ゴール設定や家族説明、指導を行う際に、患者の身体・認知機能を的確に評価する必要がある。特に在宅復帰を目指す患者においては、ADL・IADLの介助量を決定・指導する際に、患者自身や介助者の、病識または症状に対しての理解度を把握する必要がある。そこで、高次脳機能障害を有する患者に対しPCRS (The Patient Competency Rating Scale) を用いて病識の検査を実施したので報告する。

【対象・方法】対象は、平成20年3月～7月の期間で当院の回復期病棟に入院していた高次脳機能障害を有する患者10名。PCRSの検査方法に基づき、30種類の日常の能力(ADL・認知等)に対する質問を行い、患者と担当セラピスト間で点数の比較を行った。

【結果・考察】症例毎では傾向を認めたものの、10症例で比較検討した結果は著明な有意差は認められず、結果としては高次脳機能障害の特徴でもある個別性を示した。しかし担当セラピストが患者に対してPCRSを実施することで、病識の程度を把握し、訓練内容を検討、実施するための手掛かりになると感じた。現在当院では高次脳機能障害を正しく理解していただくために介助者に対しパンフレットを用いて指導を行っているが、今後は患者、介助者の両者にPCRSを実施していくことで現在よりの確かな指導を行っていけると考える。